

計画案の夢

アンビルト・プロジェクト

アトリエCOSMOS

'93~'95

⑥

鎌倉山ケアセンター計画

文=白鳥健二

写真=大橋富夫



A whiter shade of pale

宇宙船に乗ってやってきた。

1979年式、ウエストファリア社製の小型宇宙船に乗ってここまでやってきた。あたり一面、漆黒の闇の世界が広がっている。

無人の世界、時間も空間も存在しそうない闇の世界に、私は遂にやってきた。先に角寒い。湿度計は、とっくに零下を指している。船内で簡単な調理を済ませ、粗末な食事をとる。ISHELLスタンドの向いのセブンイレブンで買い求めたタコのおにぎりときねどん共食だ。)

かなり疲労している。少し睡眠をとろう。船内に常備してある寒冷地用の寝袋をこすりにして、その中にちぎり込んだ。うへん、いい気持だ。冷えた体が徐々に暖まっていく。意識がスコーシつず飛んでいくのがわかる。私の腕時計は標高1500メートル近くを指している。気圧は……ええ……と……。(意識が疎懶としてきた)

何時間経過したのだろうか……。ふと目が覚めた。先に角寒い。私の体は寝ているうちに、またすっかり冷えている。しかし目が覚めたのは寒いからだけではなかった。宇宙船の外で、さっさから何やら不思議な気配がしている。外で何か起きている。あっ／＼船内の窓から強烈な光線が差し込んでいるではないか／＼とっさに、上に昇って、小窓から身を乗り出して外を見て、ひっくり仰天。一瞬、目が眩んでしまった。冷え冷えとした漆黒の闇に大きな大きな、まんまるのお月さまが、ボッカリと浮んでいる。なんと／＼お月さまの真下には、青白く輝いた湖水がある。その湖水の水面に、もうひとつのお月さまが……。とっさの出来事に我が目を疑った。水面に映っているお月さまのまわりから真白な水蒸気が立ちこめている。ゆらゆらゆらゆらと音もなく立ちこめている。一体なんという光景だろう。

"What is happening here?"

ひと振りして目を覚したら、真黒闇の世界から一転、私の目の前には月世界が広がっている。靠みと輝く月光の世界が広がっているではないか。時間の経つのも忘れて、2階の小窓から起きることなく眺めていながら、東の彼方の空が白くと明けて来た。

「そうか／＼夜明けが近いんだ！」

ふと意識が戻った。あたりは、長らくの月の世界から、ゆっくりと太陽の世界へと変わろうとしている。隕の世界から隕の世界へ変わろうとしている。さあ、そろそろ寝ようか……。

私のスケッチノートより

(1990.10.27東京都小野川湖畔にて)

鎌倉山ケアセンター（第2次案）

——「無意識」の上に「意識」を載せる——



●COSMOS BUS

私の愛用しているウエストフリア社製の小型宇宙船（実はVWキャンパー）“好きな場所でゆったりとした姿勢をとり、自分で一人の世界に心を開設する。次第に体が空になり、豊かな思考に目覚め、至上の幸福を感じられるようになる。”

(1987年) マハリシ・ヨギ

鎌倉山ケアセンターは、主に老人介護のための福祉施設である。計画がスタートしてから5年の月日が経過した。鎌倉市としても国のゴールデンプランに沿った福祉事業として、近隣住民はもとより、市民がこぞって施設の完成を願っていた。国、そして神奈川県の補助金の歳出も決定し、市の予算も議会を通過し、すべての手続きが完了した。ここまでには良かった。

長らくこの地に在住する、児童心理学者である乾孝氏の長年の夢である、人生創造豊かな熟練者と純粹無垢な子供達が互いに交わり合い、交流する「場」を創造すること。自らの私財の大半を投じて施設建設の足しにするはずであった。

この夢の実現のために、乾氏を中心に数多くの人々が5年間日夜会合を重ね、頭をひねり、駆け付けまわった。そしていざ着工という時に、乾氏は急逝された。ここで事態は一変した。

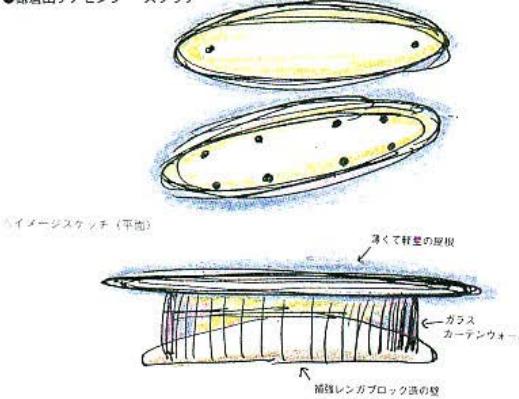
貧困していたはずの数人の近隣住民による匿名の建設反対の運動が起り、大量の資材ビルが周辺に配備されるようになった。要は環境破壊だと彼等は言う。老人と子供達との交わりの場、子供は大人から学び、大人は子供達からいろいろ学ぶ。互いに対極的な関係であればこそ引き受け合う。そういう「場」を作ろう！しかも自然豊かな町の近郊に、そして多くの市民の人達に利用してもらおうというつもりであった。

しかしながら、反対派から「騒々しくなる」「危険である」「品質が下がる」等の意見をはじめとして、「へえ」とばかり呆れてしまう意見が漏出した。「騒々しい」と言ふ町内会の領収さんも、「気分が悪い」とか「危険である」と言ふ建築家や高校生の先生も、「品質が下がる」と甲高い叫ぶハイカラな鎌倉夫人達も、最初はおむむ骨成していたはずである。

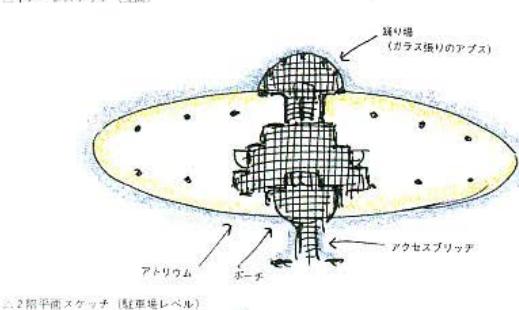
事態が一変したとたん、今まで心の底に秘めていた本音が、一気に噴出しあじめた。ゴタゴタした挙句、政治問題化し、ますます取扱が付かなくなってしまった。“さわらぬ神にたたりなし”とばかり、貧困していた議員からも、まわりの顔色をうかがっていた市長からも見放され、5年間のわれわれの地道な努力の集大成であるこの計画は、ほんのひとにぎりの住民の反対によって押損してしまった。

鎌倉市、とりわけ鎌倉山地区のような山間部の多い場所に住む住民の高齢化は年々進む一

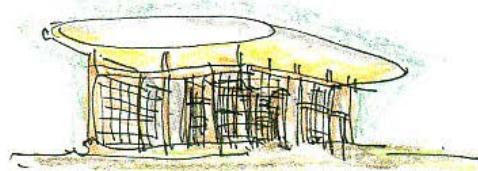
●鎌倉山ケアセンター スケッチ



△イメージスケッチ(平面)



△2階平面スケッチ(駐車場レベル)



△山本邸PARTII計画案(木造2階建)スケッチ アトリエCOSMOS 1985
木組の軸に支えられた「浮遊する」屋根。は、鎌倉山ケアセンターの屋根へ受け継がれていった。

●PSYCHEDELIC BUS

KEEP ON TRUCKIN'

サイケデリックバスによる行き先のない大冒険旅行。

“本当にHIGHになるということは、自分を忘れてしまうことなんだ。自分を忘ることは、他のすべてのものが見えるということと同じだ。” (1987年)
——ジェリー・ガルシア——



(資料)	建物名	鎌倉山ケアセンター
所在地	鎌倉市鎌倉山2丁目	1986年
構造	鉄骨造	鉄筋コンクリート造
面積	敷地	1,556.80m ²
	建物	230.50m ²
	駐車	42.50m ²
	T字	26.50m ²
	P屋	20.50m ²

△HUMAN BE IN SUMMER 1987



△フラワーパワーのリーダー
ティモシー・ラリー博士
(精神革命の預言者)



△設計中に数々のケアセンターを見学した。その時に出会ったおばあちゃんたち。



方、この種の施設は地域住民にとって必要不可欠であったにもかかわらず、かくの如くの結果となつたのである。

無意識のうちに円くなってしまうと、前に述べたが、本計画案の平面は指揮形をしている。鎌倉山は、鎌倉市の西部に位置し、緑豊かで、たいそう見晴しが良く、場所によっては相模湾や富士山が一望。市内における第一級の風致地である。この施設が建設される予定だった敷地も、見晴しの良い高台の急傾斜地で、建物の軽量化による安全性と機能性、そしてそれらを含めたデザイン性を設計の最も重要なテーマとして自らに課したものである。

たまご形をした指揮形の平面は例によって無意識に出来上がった。そしてその上に薄くて軽い屋根が載っている。この屋根を一層層く見せるために、壁から離脱させ、宙に浮かせる。一方、屋根の重圧から解放された壁は、自立性を獲得し、自由を調和しているように見えないでもない。無意識な壁の上に意識して出来上がった屋根が載っている。

ここで言う無意識とは膨らみのある肉体的、若しくは母性的なるもの、縮されたいと願う人間の本能を包み込む存在。一方、意識とは建築家のイメージ。そのイメージを具現化するためのアナロジーの存在ではないだろうか。

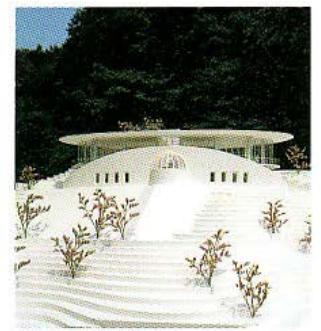
この建築の機能的特性である相対する二つのものの存在。すなわち純粹無垢で、未来形の象徴としての子供達と、既に人生のあらかじめの喜怒哀楽を体験し、保有していた大半の時間を消費し尽し、一見、過去形の象徴として見なされる老人達。しかしながら「過去」があるからその対極の「未来」があり、また「過去」と「未来」が互いに相交わるその「間(はざま)」に「現在」が刹那的に存在することの重要性。

そんな二つの異なった時刻を内包する母性的な空間は、軽くて半透明な屋根の下に納まっている。

しかも埠々とした月下旬に納まっている。

“SOMETHING IS GONNA HAPPEN!”

これから何か起りそうな、そんなワクワクする気配を孕んでいる……。そういうイメージを喚起するアナロジーを大切にしたつもりである。



△鎌倉山ケアセンター 建築写真 JETAKU KENCHIKU 1990/1 105